マタギ雑感

足澤　至

岩手の山野には、沢山の鳥獣が住んでいる。最近減って来ているとは云っても、まだまだ本州では、最も良い狩猟地とされている。

父から教わった銃猟、マタギの精神も今では懐かしく楽しい思い出として、走馬灯の如く次から次へと思い起こされる。父と弟と三人で、年越しそばのダシに、またお雑煮のダシに、友人・親戚に配るキジを獲るため、葛巻方面に泊りがけで出掛け、炭俵にキジを一ぱい詰め込みチッキにつけて持ち帰ったのも、つい先ごろの様に思い出される。

マタギは職業猟師の総称であり、その語源は定かでない。秋田の阿仁マタギ、岩手では雫石の御所・御明神には集団を作り住んでいた。山を跨いで歩くことから云われたと云う説と、鉄砲を撃つ時に木の枝の股になっている部分に銃を据えて撃つことから、木のマッカがだんだんなまってマタギと云うようになったと云う説もある。また、アイヌ語から来ていると云う説もある様だ。マタギをアイヌ語では「マタウンバ」と云う様で、そこから起こったであろうとある郷土史研究者は云っている。

何れにしても、昔から狩猟は限られた一部の者にしか許されず特殊の上層階級の者、例えば地方の豪族の長とか、藩主とか、そして狩猟を職とする猟師に限られており、農耕を専業とする者は狩猟をしなかった。特に仏教の思想が入って来ると、その傾向は更に強まり「キジ・山鳥を獲れば荒天になる」「キツネを獲れば火事になる」と云う様な表現で鳥や獣を大切にする

風習があった。

マタギにとっては、鳥獣は自分たちの生活の糧・食糧だったから決してタネを絶やす様な事はしなかった。鳥猟なんかでも最初に出たメス鳥は絶対撃たないと云う事等は、今でも言い伝えられ守られている。これを守っていれば絶滅と云う事はない訳です。また鳥獣の少なくなった土地の地方には行かない、足を踏み入れないと云う事も徹底して守っていた。またマタギは狩猟期には禁欲生活をし、マタギの頭（かしら）は妻帯しなかった。

明治の始め頃から職業猟師（マタギ）とは別に、猟を趣味とする人達が増え始め古くから伝わって来た狩猟道もかなり変わって来た。昔は他の土地・地域に狩猟に入ることはしなかったが、これが守られなくなり始めてから乱獲が始まり、鳥獣が極端に少なくなって来た。

昔から狩猟道を守り鳥獣を守り育て、増殖をはかり乍ら増えた分だけ食糧とか楽しみの対象にすると云う精神と、岩手の猟を楽しいものにし、子々孫々にまで残そうではないかと云うことから、昭和十三年岩手マタギ会が結成された。発起人の方々を見ると、吉田賢雄（弁護士）金田一熙（教員）三田道忠（三田商店）中村治兵衛（三田商店）柿崎洋一（農林省小麦試験場々長）小田伍三（農業）内藤松次郎（毎日新聞支局長）佐々木清則・佐藤八郎・足澤勉の十氏。その後欠員補充で石動隆一（医師）川村道郎（県猟政主任）渡辺文雄（酪農推進本部）足澤至（教員）高橋健治（木材業）は袴田作右衛門（市議）の六氏。県猟友会々長鴨澤恒次郎氏は客分であり、最年長は金田一氏で七十一才、最年少は足澤至の三十六才であった。会員たちは会の長を「かしら」と云い頭は吉田賢雄氏であった。

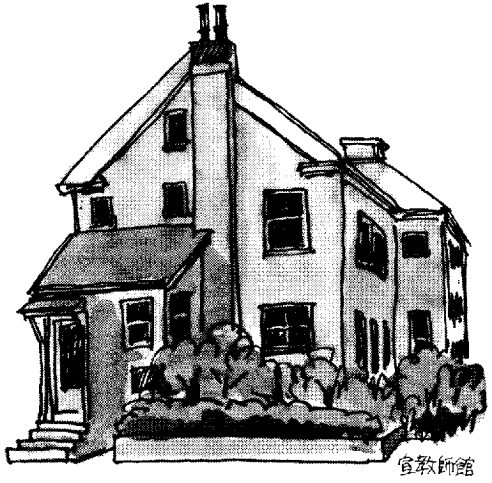
マタギ会に入るには、なかなか難しいことで会則第一条に「マタギ会の会員は、人格高潔に

してマタギ道に徹するものでなければならない」とある。会員の定数は十名と決まっているから欠員が出ない限り入ることはできない。しかも三人以上の推薦が必要であった。マタギには不文律があり、会員はこれを絶対守らなければならない。例えば、いつも行っている猟場にはタネ鳥を必ず二羽以上残しておくこと等、米内方面に行く時には葛さんに、上田方面に行く時は袴田さんに声をかけ、猟場の状況を聞いて入り、帰りには何羽いただいて来ましたと報告する。このマタギの良い不文律もだんだん乱れて来てそれが鳥獣減少の原因となって来た。

私も齢八十を越え、体力も徐々ではるが衰え始め頭の方も極めて順調に惚けて参り、これ以上狩猟を続けていると、回りの人に迷惑をかける様な事があっても申し訳ないと思い、だんだん範囲を小さくしようと考え始めました。昨年は二丁ある銃のうち日本製上下二連銃を返納したし、今年は長年父が愛銃として大切に所持して来た英国製（B・S・A）水平二連銃の所持も諦め、期限のきれる来年一月二十日までには返納しようと思っている。

父から教わった銃猟の技術、鳥獣の生態等心残りは沢山あるけれども、時代の趨勢と回りの安全と云うことから致し方ないと考えている。これで昭和二十年代から六十年近くも続けてきた、こよなく愛した趣味の銃猟が出来なくなるのも寂しい気持ちで一杯であるが仕方がない。思えば生まれ故郷玉山の薮川外山の兎狩り・一回の巻き狩で、七十羽を撃った思い出・五葉山での鹿狩り、また兄（栄）が経営していた北海道日高本桐牧場での害鳥獣駆除鹿狩りでは、エゾ鹿を一度に三十頭も仕留めたり、また昭和四十八年には大日本猟友会々長、徳川義親氏より狩猟指導員としての功績によって表彰状をいただく等、その楽しい思い出は枚挙にいとまがない。

狩猟の他に鳥獣の剥製を余技として身につけており、猟仲間から頼まれたり子供等の学校に教材として寄贈したり、鳥類の判別にと警察に寄贈した事もあった。

銃器は、一寸誤ると大変な事故にもつながるし、世の中にはこれを悪用しようとする輩もいる。そういう状況を少しでも少なくし、少しづつ回りを整理しながら、みんなに迷惑のかからない安全な趣味をみつけ、余生を送りたいと最近思っている。

（平成二十一年十二月二日　足澤記）